



第 115 号
北海道ポーランド文化協会 会誌『ポーレ』
2025.4.15



第 115 回例会（どなたもご参加歓迎）

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞 & 交流会 2025-2

『水の中のナイフ』

1962 年 | 94 分 | ポーランド | モノクロ

1962 年ヴェネツィア国際映画祭 国際批評家連盟賞



5/8 (木)



18:30~ 入場無料 定員 50 人

札幌エルプラザ 4F 大研修室 (北 8 西 3)

予約推奨 (お問合せ先) ☎080-4071-0956 (安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com

ロマン・ポランスキー監督 (1933~) 現代を代表する映画監督の 1 人。仏・パリに生まれ、第 2 次世界大戦を目前に両親とともにポーランドへ。戦時中はナチスからの逃亡生活を生き延び、戦後ポーランドの国立ウ

ッチ映画大学で短編を制作。長編監督デビュー作 (脚本も) 『水の中のナイフ』 (62) は米アカデミー賞 外国語映画賞にノミネート。英国を拠点に『反撥』 (65)、『袋小路』 (66) などで評価を高め、ハリウッド進出作『ローズマリーの赤ちゃん』 (68) が大ヒット。『チャイナタウン』 (74) はアカデミー賞 11 部門にノミネート。『戦場のピアニスト』 (2002) でアカデミー賞 作品賞・監督賞、『ゴーストライター』 (10) でベルリン国際映画祭銀熊賞 (監督賞) を受賞。私生活では、妻で女優のシャロン・テート殺害事件、未成年の少女への性的暴行で有罪判決などが話題となった。

お話：坂尻昌平氏 (さかじり・まさひら) 映画研究者。早稲田大学大学院に学び、現在、札幌大谷大学非常勤講師。共編著『ジャック・タチ』 (1999)、『ジャック・タチの映画宇宙』 (2003)、『世界映画大事典』 (08)、『淡島千景~女優というプリズム』 (09)、『渋谷実~巨匠にして異端』 (20) など

【作品について】 亡命作家ポランスキーが祖国ポーランドに残した唯一の長篇。ワイドなど強烈な戦争体験からメッセージ性の強い作品を放ったポーランド派第一世代とは異なり、より内省的な作風が第二世代の特徴で、本作も登場人物はわずか三人、裕福な夫婦と貧しく屈折した若者の出来事を描く。舞台となる洋上の小さなヨットで過ごす二日間に起こる、それぞれの感情の揺れを鋭利な映像感覚で紡ぐ、見応えのある作品だ。

週末を過ごす壮年の夫アンジェイと若妻クリスティーナの夫婦が、ヒッチハイクの若者を車に乗せる。夫がいたずら心で若者をヨットに乗せたことから物語は動き出す。この夫婦は実は仮面夫婦なのだが、ヨットを操るときは統率が取れており、初めは反抗的だった若者と夫婦との距離感も次第に縮まっていく。

だが妻と若者の間に微妙な雰囲気が生じてくるにつれ、徐々に三角関係が生じる。翌朝、夫と若者が口論になり、夫は若者が大事にしていたナイ

フを海に投げ捨て、カナヅチだという激怒した若者を海へ突き落とし、その姿は見えなくなる。

夫婦は若者を殺してしまったのではと不安になり、夫婦喧嘩になる。その結果、夫は怒ってひとり港へ泳ぎ去る。入れ替わりに、実は泳ぎができてブイに掴まって生きていた若者がヨットに泳ぎ着き、初めて若妻と二人きりになるスリリングな心理劇だ。

最初は男らしさを誇っていた夫が見てくれだけで、地味で気弱そうだった若妻が実は逞しくてセクシーだったという、どんでん返しも見事だ。

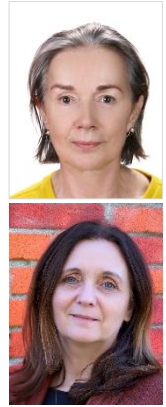
当時、音楽学校の学生だったヨランタ・ウメツカ演じる若妻が、一見地味だが官能的で魅力的だ。

『早春』 (1970) のスコリモフスキが共同脚本、音楽にポーランドを代表するジャズ・ピアニスト/作曲家のクシシュトフ・コメダ、撮影はイェジー・リップマン (『地下水道』など) によるモノクロ映像の白いヨット、空と海の光と影が美しい。以上の強力なチームが生み出した傑作である。 (池田光良、運営委員)

《第116回例会》
講演 & 上映会

どなたもご参加歓迎

2025. **6/10** (火) 18:30~
札幌エルプラザ 4F 大研修室



ポーランドと日本：新渡戸稲造とポーランドの偉人たち

～ピウスツキ家の人々（ユゼフ&アレクサンドラ夫妻とブロンニスワフ）、
パデレフスキ、キュリー夫人ほか～

講師：ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska =上写真=
スレクヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館 開発担当副館長、元駐日ポーランド共和国大使
マウゴジャータ・バサイ Malgorzata Basaj 同博物館 展示・普及部長 =下写真=

入場無料、定員50人、予約推奨【お問合せ先】 hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956 (安藤)

講演 1

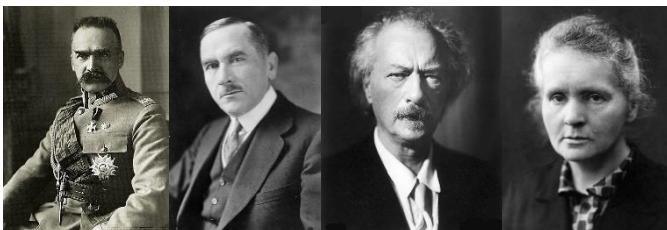
新渡戸稲造が語ったポーランドの英雄たち

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

新渡戸稲造(1862-1933)=写真=
は、台湾総督府民政部殖産局長
心得、ジュネーブの国際連盟事務
次長、国際連盟知的協力委員会
委員などとして日本政府のために
働いた。彼は平和主義者だったが、
植民地支配の推進者でもあった。



新渡戸はそのキャリアの中で数多くの人々と
出会い、後に日本人読者のために書いた著書、あ
まり広くは知られていない『東西相触れて』(1928)と
『偉人群像』(1931)の中で彼らを「偉人」と呼び、そ
の言葉を記録し解釈した。彼自身「東洋と西洋の
架け橋」になりたかったのだ。ポーランド軍の指導
者ユゼフ・ピウスツキ(1867-1935)、国民民主派の
政治家ロマン・ドモフスキ(1864-1939)、首相であ
り名ピアニストでもあったイグナツィ・パデレフスキ
(1860-1941)、そして世界第一の女性科学者マリ
ア・スクウォドフスカ=キュリー(1867-1934)=下写真=
についての記述は、日本人が異なる文化的背景を
持つ外国の英雄をどのように見ていたかを知る上
で興味深い糸口となる。



新渡戸の見解は日本で軍国主義が台頭した時
代に発表された。彼が「偉大な」ポーランド人を描
写する方法は、社会を教育し「西洋」の価値観を植
え付けるといった目的に完璧に合致していた。逆説的
だが、彼は日本で排外主義が強まった時代に、出
会った人々の言葉や行為を選んで外国人(西洋人)
のロールモデルを作ろうとしたのである。

(日本語、30分)

講演 2

19-20 世紀の独立闘争におけるポーランド女性

マウゴジャータ・バサイ

独立運動における女性の活躍は、ポーランドが
独立を失ってから100年以上経った19世紀末から
20世紀初頭にかけて起こった。それ以前には、家
庭の守護者としての女性の役割という文化を打ち
破る長いプロセスがあった。それは西欧からポー
ランドに伝わったフェミニズムの潮流の結果というより、
独立の願望に女性も参加した結果であった。

19世紀ポーランドの女性解放プロセスにおける
重要な要因には、社会的・経済的関係の変化もあ
る。すなわち知識階級と労働者階級が分離し、女
性が収入のある仕事に就く必要があったのだ。そ
の重要な側面は、女性を専門的に教育し活動させ
る社会団体の活動に女性が参加したことだった。

彼女たちは独立・社会主義運動の中で、政治分
野(ポーランド社会党)でも活動し、労働者サークル
で扇動活動を行い、違法な新聞やビラやアピール、
武器や爆発物まで配達した。彼らは侵略者に対す
る戦闘行動の組織化にも参加した。

第一次世界大戦の勃発以前から、ユゼフ・ピウ

本イベントは、ポーランド共和国文化・国家遺産大臣の「Inspiring Culture 2025-2026」プログラムにより資金提供を受けています

スツキ率いる軍事運動の中で、女性たちの要求により、最初の女性小銃部隊が創設され、彼女たちはそこで軍事訓練を受けた。その結果、戦時中、彼女たちはポーランド軍団第一旅団の伝令・諜報部隊やポーランド秘密軍事組織の女性部隊で活躍した。軍の構成の中で彼女たちは小さなグループだったが、ポーランド軍に所属し勤務したという点で、後につづく世代に道を開いた。

1918年11月、ポーランド国家の再興とともにポーランド女性は完全な選挙権を獲得した。それから10年も経たない1927年5月、アレクサンドラ・ピウスツカ(1882-1963、元陰謀家・戦闘員、ユゼフ・ピウスツキの妻)の発案により、自由を求める闘いの元参加者たちのサークルの中で、女性戦士たちの手



記を書き残すという構想が生まれた。その結果、ユゼフ・ピウスツキとポーランド社会党を中心とする独立派左翼と思想的に結びついた世代の女性たちの集合的肖像となる100以上の証言が集められ『忠実な奉仕』という表題で出版された。

アレクサンドラ・ピウスツカとゾフィア・モラチェフスカ(1873-1958、ポーランド初代首相夫人)=上写真はこの潮流と連携して、自由ポーランド国家でも積極的に公的・政治的生活に参加した。

(ポーランド語+日本語通訳、合計40分) (安藤厚訳)

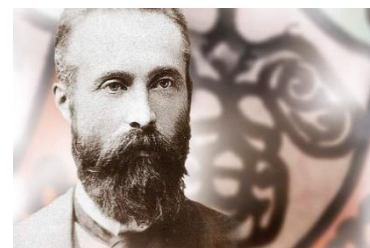
ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』

ヴァルデマル・チェホフスキ監督 | 2016年 | 53分 | デジタル | 日本語字幕版

この映画は、ユゼフ・ピウスツキの兄で、逆境にもかかわらず、サハリンの先住民の文化の最も重要な研究者の一人となったブロニスワフ(1866-1918)の驚くべき伝記を紹介する。

苦しみを知識への情熱に変えることができた男の物語

サハリンへの道：流刑から科学へ



ブロニスワフは非常に魅力的な人物で、その人生はまるであり得ない冒険のシナリオのようだ。ポーランドの自由のための戦いに参加し、皇帝アレクサンドル3世に対する暗殺計画に加わった罪で有罪判決を受けた彼は、世界で最もアクセスしにくい土地のひとつであるサハリン島に追放された。

15年の禁固刑に減刑された死刑判決は、ピウスツキにとって並外れた科学的冒険の始まりとなった。ピウスツキは運命に屈することなく、強制された追放生活を先駆的な民族学調査の機会に変え、現地の人々の文化に対する認識を一変させた。

ピウスツキの民族学的発見

ブロニスワフ・ピウスツキの主要な業績は、サハリンに住むアイヌをはじめとする少数民族の生活と文化に関する包括的な研究であった。アイヌ最古の肉声を録音し、アイヌ研究の草分け的民族学者となるとともに、弱者の側に立ち少数民族の生活改善にも尽力した。

彼の研究は今日に至るまで、この忘れ去られた民族集団に関する人類学的知識の基礎資料となっている。2013年には白老に彼の記念碑が建立された。

ブロニスワフ・ピウスツキは、最も困難な状況にあっても夢を実現し、世界科学の発展に貢献できることを証明した。



ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ』より



第 114 回例会
報告



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞

『イーダ Ida』2025/3/19



本例会は参加者 34 名（うち一般 25 名）と盛況だった。昨年の上映会で討論の時間が足りないとの指摘があり、今回は解説の時間を短くして討論の時間を十分に取って、活発な議論が行われた。アンケートでは「大変良かった」（5点）7名、「良かった」（4点）4名、平均 4.64 点とかなりの高評価だった。反省点は、上映開始直後の音量調節が不十分だったこと、字幕が見えづらいと指摘があったこと——会場の構造上、投影の位置は変えられないが、椅子の配置を変えられるか、検討したい。

解説の映画研究者、坂尻昌平氏は、叔母ヴァンダにマグダラのマリアを重ね合わせたストーリーや映像表現、さらに音楽設計も素晴らしく、スターリン政権後のポーランドではジャズが流行し、特にコルトレーンの名曲「ナイマ」は愛の告白に聞こえ、バッハのコラールはイーダの揺れる心を象徴していることなどを述べた。

本作は、第二次大戦中のポーランド人によるユダヤ人虐殺事件や、スターリン時代末期に自国民を厳しく罰したポーランド女性検察官など負の歴史も公平に描いた点が優れている。日本映画では被害者を描く優れた作品が多いが、加害者の視点が不十分だという批判が多いのに対し、欧州では近年、複眼的視点に基づく作品が増えていることは好ましいと指摘した。

当時の政権下でジャズは弾圧されなかったのかとの質問には、そのようなことはなく、ポーランドでは 1950 年代後半～60 年代にジャズを巧みに使った名作映画が多数制作されたと説明された。（池田光良）

〈感想〉アンケートから

- ✓ モノクロ映像と音楽とに引き込まれました。イーダや他の人物の心のゆらぎを感じながら、鑑賞会はずっとの時間となりました。（50歳代）
- ✓ 第2次大戦時のユダヤ人虐殺が物語のベースにある中でのイーダとおばヴァンダの自らを探る旅は、ポーランド映画独特の閉塞感が終始感じられるものであり、モノクロ映画であるにもかかわらず色を感じさせる作品で、最初から最後まで見入ってしまいました。日本やその他の国々で戦争後の負の題材とするものがあるが、ポーランド映画の雰囲気には堪能させられました。もう一回じっくりと観てみたい作品となりました。（60歳代）
- ✓ おばのヴァンダが心に傷を持った女性を見事に演じていて心に残りました。イーダが修道院で育ち、おばに会って、何故自分が修道院に預けられたの

かを知っていく物語でした。映像が素晴らしく、イーダが少女から大人の女性になっていく過程が見事でした。『イーダ』を観た後にポーランドのアウシュヴィッツに行く機会がありましたが、景色が北海道によく似ていて驚いた日を思い出しました。おばヴァンダという抵抗運動の闘士を処刑したこともある複雑な女性を通じてポーランドの複雑な背景を知ることができました。（70歳代）

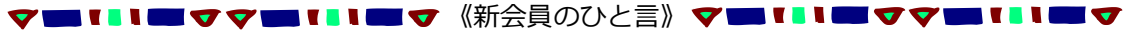
- ✓ ポーランドの情景、文化、人々の表情などから、異国を感じ興味深かったです。あらすじをチラシで拝読し、ストーリーは理解しましたが、歴史背景の知識があれば、まだまだ深読みできたと思います。ポーランドの歴史に触れて参ります。映画解説で味わいをより得られました。本日の上映、ありがとうございました。（60歳代）
- ✓ 私事だが、日本での公開当時劇場で観ようと思ったがいつの間にか上映が終了しており、後に DVD 化されて買おうと思った（レンタルショップで取り扱ってなかった）が、廃盤になりプレミアムが付いてしまったので、今回これを好機と思い観に来た。些細な生活者でも耳をつんざくような「聖」の修道院での生活と、常にどこからか音が飛んでくる「俗」の一般庶民の生活がとても対比的。修道女の主人公が唯一の肉親でほとんど馴染みのない人のもとに訪れ生活するという展開は、ルイス・ブニュエルの『ピリディアナ』を想起させた。（30歳代）
- ✓ 日本の民話や昔話と共通する感性だなあと感じました。例えば「雪女」。これぞ映画という映画でした。バッハが好きなので、バッハが使われているのもよかったです。（50歳代）
- ✓ ストーリーは追えたが、細かな描写は分からないところもあった。心の中の葛藤はある程度分かるのだが、同時代の同国人でないと理解できないところがあるのでは？特にキリスト教、ユダヤ教は知識としては少しはあるのだが、一般の日本人には分からないところがあるのではないかと思った。（60歳代）
- ✓ イーダ役（アガタ・チュシェブホフスカ）はとても良い。

新人とは思えない。解説で内容がよく分かった。その上でもう一度見たい。(60歳代)

✓(質問)私はパヴェウ・パヴリコフスキ監督作品は『COLD WAR』しか観たことがない上に、1960年代のポーランドの状況など全く知識がないのだが、

彼の作品では劇中の音楽が舞台の時代を描くことが多いが、当時のポーランドでジャズは一般的に流行していたのか。ジャズ=西側音楽は弾圧対象ではなかったのか。

✓字幕が見えづらく残念。



ポ文協に入会して

私は平和・環境・人権をテーマに、個人で『銀河通信』を発行して今年の7月で37年になります。こんなに長く続けられるとは夢にも思いませんでした。「もういいか」と25周年の記念会を開いていただいたときに発行をやめることも考えましたが、朝日新聞記者だった植村隆さんが現役時代に書いた慰安婦問題で「嘘だ、デマだ」とバッシングを受け、当時、植村さんは北星大学で講師として勤務していましたので、多くの市民が立ち上がり「植村裁判を支える会」を立ち上げ、私も事務局の一翼を担いました。私の『通信』でも何度も取り上げました。

ポーランドへの関心はずいぶん前からになります。中学生の時に『アンネの日記』を読んで衝撃を受けました。ユダヤ人であったためアムステルダムの隠れ家で暮らし、密告で強制収容所に送られました。家族や同居人を鋭い観察眼で表現しました。

なぜアンネが迫害に遭わなければならなかったのか知りたくて、ポーランドにあるアウシュヴィッツ博物館を訪ねたのは2014年でした。当時「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」でささやかな活動をしていて、その仲間と出かけました。アウシュヴィッツ第二収容所のビルケナウにも行き、生き延びた女性の証言で「着たきりでシラミ、ノミ、ダニ、南京虫が襲い掛かる劣悪な環境で体中が赤くはれていた」と書いています。まったく人間扱いされてい

樋口 みな子



なかったことに涙ができました。アンネは病気でドイツのベルゲン・ベルゼン強制収容所で同じような環境で亡くなったのでしょう。

『アンネの日記』を読んで『銀河通信』もアンネのような社会に開かれた鋭い批判精神に近づきたいと思いました。ポーランドでは映画『シンドラーのリスト』で有名なシンドラーの工場も訪ねました。跡地は歴史博物館になっていて、助けられた工員の写真が壁面にずらりと並んでいて、シンドラーの良心に触れて感動しました。

ポーランドは、第二次世界大戦の時、ソ連とドイツに挟まれて大変な苦難を強いられました。地下組織での抵抗活動はワイダ監督の『地下水道』で描かれていますが、ソ連占領下の住民も収容所に送られたり虐殺されたりしたことや、20,000人を超えるポーランド軍将校がカティンの森で殺されたことは国民には隠されていたことを映画で初めて知りました。人間としての強さと弱さを何度試されてきたのだろうと思います。日本人はもっと真剣に「戦争する国にしているのか」と一人ひとりに問われていると思います。

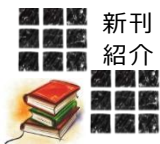
映画上映会や音楽会などみなさまとの交流を楽しみにしています。(ひぐち・みなこ、2025年1月入会)

さっぽろ雪まつり 第49回国際雪像コンクール (大通 11 丁目 国際広場 2025.2.2-7) に

ポーランドチーム (10 回目、昨年と同じヴロツワフ美術大学 ASP Wrocław チーム) が出場しました



=中写真中央= 雪像「Homo Creator 創造する人間」人間のもつ創造的エネルギーと無限の思考力を象徴する作品です
=右写真左より= プシエムイスワフ・ピントル Pszemyśl Pawl Pintel (チームリーダー), マチエイ・アルブジコフスキ Maciej Albrzykowski, アレクサンドラ・ヤニク Aleksandra Janik さん (撮影 安藤厚; 尾形芳秀)



新刊
紹介

『ジェロムスキ短篇集』

Opowiadania Stefana Żeromskiego

小原雅俊(監訳)

〈ポーランド文学古典叢書〉12

未知谷 2024.11



portrait of S. Żeromskii
by E. Niewiadomski 1900

「ピョートル博士」を翻訳して

私の翻訳作品が活字になるのは『ポケットのなかの東欧文学』（成文社 2006）以来2度目になります。ポーランド語読解能力はその時より向上したと思いますが、日本語表現能力はお粗末なまま、かなり小原雅俊先生に助けいただきました。最初、何を訳そうかとネットで読めるジェロムスキ作品にざっと目を通しました。その中で私の心にヒットしたのが「ピョートル博士」でした。

介護・家業と翻訳と

現在、私は千葉から山口に移住し、自分の親の介護と家業の手伝いをしています。親が高齢で、もう代替わりすべき時期だと思い、東京にいる跡継ぎの兄にいつ帰って来るのか打診するも「今は帰れない」の一点張り。父は「お兄ちゃんが帰って来るまで頑張る」「自分が死んだら帰って来るじゃろう」と兄の帰りを待ちわびています。「ピョートル博士」では主人公のドミニク・ツェジナ氏が息子ピョートルの帰還を待ちわびており、私はドミニクと父、ピョートルと兄を重ねてしまい、「これはうちの話だ、これにしよう」と決めました。

選んで訳し始めたものの、家業に加えて母の骨折や入院、父を連れての病院通いでまとまった時間を取れることは少なく、締切を過ぎてはまだ出来上がらず、小原先生やポーランド人の友人に助けられながら何とか校了にたどり着きました。

言い回しが難解でつい分かりやすく意識してし

まうのですが、文学作品の場合は難解なものは難解に訳さないといけませんし、そもそも私の頭の中の辞書には難解な日本語の語彙が無く、お恥ずかしい話、小原先生のアドバイスを頂いてもその語を辞書で引かないと意味が理解出来ないという事態も。世の中の翻訳に携わり数々の本を出されている方々の優秀さとご努力にただただ敬服する次第です。

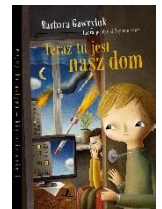
この作品の中には没落シュラフタで苦勞して息子のために働いてきた父と、留学を経て高学歴の子の考え方の違いがポーランドの農村や鉱山の風景とともに描かれています。子は親の言う事を聞くもの、帰ってきて跡を継ぐもの、と信じる親世代が近代的な考えに染まった子世代から考え方を否定され継承を拒否され失意に沈む。これは私の実家に限らず世界中の普遍的な出来事のようにですが、消滅の危機が迫る過疎地域に住む者としては、人口減少と相まってとても複雑な心境です。

(前田理絵、会員)



『いまは、ここがぼくたちの家：
ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』
バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)
田村和子(訳)
彩流社 2024.12

Teraz tu jest nasz dom.
Barbara Gawryluk,
Maciej Szymanowicz,
Literatura 2016



戦火に追われ、ウクライナからポーランドに逃れた子どもたちは、「せんそう」や国外避難、新しい土地での生活をどのように感じたのでしょうか。この絵本は、ウクライナ東部のドンバス地方から 2014 年にポーランドに避難し、難民となったバラノフスキー一家の実話をもとにした物語です。平和がどれほど尊いか、子どもたちの気持ちが痛いほど伝わってきます。

ウクライナから

ドンバス地方で建設会社に勤めるポーランド人の父親とウクライナ人の母親、長男で小学3年生の

ローマン、小学ゼロ年生(幼稚園年長組に当たる)の弟のミコワイ、妹のナタリア(3つ)は、近くに住む祖父母とともに楽しく平和な日常を送っていました。

いつも遊びに行く祖父母の台所は、ボルシチや

ピェロギ(餃子に似た食べ物)やロールキャベツのにおいがしました。おばあちゃんは夜になるとウクライナの昔話をしてくれ、おじいちゃんは、魚釣りやキノコとりに連れて行ってくれたそうです。しかし、ある日突然、ロシア軍がやって来ました。

巨大な戦車がすべるように進んで来て爆発音や警戒警報が鳴り響きます。一家は地下に隠れました。爆弾が学校の屋根を壊しました。父親は「そかい」を決意します。子どもたちのぬいぐるみや積み木、本などを小さなリュックに詰め込み、ウクライナ軍の兵士に護衛されながらバスで移動し、輸送機でポーランド側に脱出します。でも祖父母は残りました。高齢の人たちは居場所を変えたくないのです。

ポーランドへ

一家はポーランド北東部の難民センターで半年過ごした後、支援財団が世話をしてくれた南部の団地に落ち着きます。ローマンとミコワイは新しい学校に通い始めますが、思うように周囲になじめません。ローマンたちはポーランド語を話せるのですが、クラス子どもたちに「やあ、野蛮人!」「あんたたちって難民なんですよ」と言われ、意地悪をされたりします。

ですがローマンは「君たちのことはちっともこわく

ない。こわいのは戦争と発砲と爆発だ」とポーランド語で言い返し、一緒にサッカーをするうちに自分らしさを取り戻します。戦争で故郷に戻れない中、なんとか自分の居場所を見つけたのです。絵本には柔らかい色合いのイラストと表情豊かなキャラクターたちが描かれ、全体を優しい雰囲気になっています。

この物語の歴史的背景を少し説明しましょう。ウクライナでは2014年2月に親ロシア派の大統領ヤヌコーヴィッチがマイダン革命によって追放されました。これを受けてロシアはクリミア半島を3月に併合。東部ドンバス地方で反政府分離運動を引き起こし、分離派を後押ししました。ロシアとの戦争はこのころから始まっており、2024年2月に全面侵攻したわけです。

筆者は昨年4月、ポーランドのクラクフでウクライナ難民の人たち取材したことがあります。難民の子どもたちの中にはポーランドの小学校になじめず不登校になったりする子がいました。ポーランドの人たちはウクライナ難民のために寄付を募り、語学教室を開き、住居や食料、衣服、靴を提供して全力で支えています。この絵本は寛容さ、偏見にとられないこと、人の気持ちに共感する大切さを教えてくれます。

(先川信一郎、ジャーナリスト、会員)

ロシアによるウクライナへの侵攻から3年が経過し、停戦に向けた主要国間の協議がはじまり、生命優先の名の下に大国の駆け引きも渦巻いています。

本書に登場するローマン少年一家がウクライナのドネツクからポーランドに避難したのはロシア軍がウクライナ領のクリミア半島に侵攻し、さらにウクライナ東部まで戦闘を起こした2014年。この時の紛争が2022年2月14日のロシア侵攻の発火点であるという訳者田村和子氏の解説を読んでではじめて、このロシア侵攻が青天の霹靂のように突然はじまったのではないことを、恥ずかしながら知るのでした。

どの史実もそこだけを抜き取って理解することが難しい領土問題ですが、本書では実に率直な子どものまなざしの視点からの描写によって、戦争をテーマにしながらも、大人の既成の正義概念を柔らかく解かず良書としての価値が際立ちます。ポーランドの子ども向けに書かれた本ですが、困難に立ち向かう大人への勇気の入門書ともなるでしょう。

ローマンの一家の日常として、刻一刻と戦火が迫ってくるあり得ない現実、そして疎開という国外脱出行、祖父母との別れ、ポーランド難民センターでの一時避難生活、さらにぼくたちの家での新生活への様々の戸惑いと、それでも新芽のめばえを

携えて成長していこうとする主人公ローマンの心のひだに、そっと寄り添う筆者の視線が、読む大人の目を浄化させます。

想像をいかに膨らませても、このロシア侵攻で犠牲になった膨大な数の人々の嘆きといたわしさには到底手の差し伸べようもない無力感に苛まれますが、受難の時代を乗り越えたポーランドの精神性を日本の私たちこそが背負う役割が問われているのです。あらゆる場面で無知による偏見で線引きされる差別が横行していますが、別け隔てない天日のような心根、振る舞いを、この日本でも未来の大人になることも達に降り注げる日常の自分でありたいと読後に感じました。

そして世界の情勢と報道のあり方をもう少し学ばなければ… 心が張り裂けるほどの痛みが時と共に緩慢になりつつある怖れに愕然とする契機にもなりました。

(熊谷敬子、運営委員)



ヴィスピャンスキ作、津田晃岐訳『婚礼』に触れながら 田村 和子

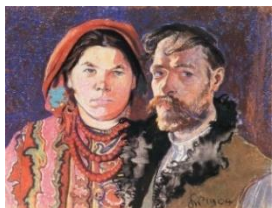
我が家の狭くて短い廊下の壁に、クラクフに初めて滞在した時にフロリアンスカ通りの路上で購入した一枚の絵がかかっています。ヴィスピャンスキ作のパステル画『少年の肖像』=写真= のレプリカです。

頬杖をついてこっちを見ている少年の目に引きつけられ、思わず衝動買いしたのですが、今でもこの絵の前立つと、良きも悪きも我が心の全てを見透かされているような気がします。



1869年にクラクフで生まれたスタニスワフ・ヴィスピャンスキは文芸運動「若きポーランド」を代表する画家であり、詩人であり、劇作家であり、建築家でした。劇作家として高く評価されている作品は何と言っても『婚礼 Wesele』ではないでしょうか。

『婚礼』のモチーフになったのは、1900年の晩秋にクラクフ郊外の村、ブロンヴィツェ・マウエの農家で実際に行われた詩人の花婿と農民の娘の結婚披露宴で、ヴィスピャンスキ自身も出席しています。劇中には客として訪れた実在の人物—主人、花婿、花嫁、記者、詩人、農民、貴族、ユダヤ女性、等々、そして歴史と文学と伝説から現れた亡霊たちが登場します。亡霊たちは実在の人物たちの内面を映し出す存在です。



(参考) 妻と芸術家の自画像 1904

<http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE86Wyspianski.pdf>

ポーランドではこの作品を知らない人はいません。日常生活においても、そして児童文学の作品中にも引用されています。たとえば、ポズナン出身の児童文学作家、マウゴジャタ・ムシエロヴィチ作の『金曜日うまれの子 Dziecko Piątku』では、学校が休みに入ると自作の人形を駆使して路上で一人芝居をしている15歳の少年コンラドが自ら脚色

した『婚礼』をポズナン郊外の小さな町の広場で披露しています。その際に知り合ったばかりの16歳の少女、アウレリアに次のように言います。

「いくつかのシーンを選んでぼく自身が脚色したんだ。『婚礼』はいつの世でもその時代を反映しているし、ポーランドの戯曲の中では一番予言的な作品だからね」

1979年秋からの一年間、わたしは家族とともにクラクフ北西部の団地で生活しました。その団地はブロンヴィツェ・マウエ地区に接していて、団地からその地区までの道はわたしのお気に入りの散歩コースでした。ブロンヴィツェ・マウエに足を踏み入ると、そこには街中とは違った落ち着いた農村風景が広がっていてほっとしたものです。バラの木を雪と寒さから守るために藁で巻いた、邦訳版では「藁ぼっち」と訳されている *chochol* (ホホウ)が農家の庭にあったことも覚えています。

しかし当時、わたしはその地区が有名な戯曲の舞台になっている村だとは思いませんでした。藁を巻かれたバラの木が作品の中では亡霊として登場し、最終場面では登場人物たちを夢遊病者のような踊りの輪に誘導しているとは思ってもみませんでした。それから45年の歳月が流れ、『婚礼』はわたしにとって、ポーランドの原風景が広がる作品のひとつになっています。

一昨年、待望の『婚礼』邦訳版(未知谷、2023.12)が刊行されました。訳者はポズナン在住の津田晃岐さん、安藤厚先生のかつての教え子さんです。クラクフ近郊の方言を日本の方言によって表現した津田さん訳の『婚礼』を近い将来、日本の劇場で観ることができる日がくることを楽しみにしています。

(たむら・かずこ、ポーランド児童文学翻訳者)

展覧会 **若きポーランド** ~ 色彩と魂の詩 1890-1918

京都国立近代美術館 2025.3.25 (火) - 6.29 (日)

19世紀後半、ポーランドの歴史や文化的逸話を大きなスケールで描き名声を博し、クラクフ美術学校校長を務めたヤン・マテイコのもとから数多くの若き芸術家たちが巣立ちました。彼らは祖国の独立を願いつつ、そこに自らの個人としての心情を結びつけ、象徴性に富み色彩豊かな独自の芸術を絵画のみならず応用芸術や文学をも含む広い分野で展開し、〈若きポーランド〉と呼ばれました。本展では、ヤン・マテイコを前史とし、〈若きポーランド〉が生み出した芸術を包括的に日本で初めて紹介します。ヴィスピャンスキの作品もご覧になれます。





新刊
紹介

『クラクフ：書くための本』日本語版

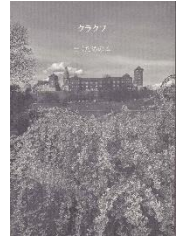
田村和子、エルジビェタ・タバコフスカほか(文)

リディア・ロズムス(写真)

出版社 アウステリア、クラクフ 2024.2

Kraków: Książka do pisania,
wersja japońska.
Elżbieta Tabakowska,
Kazuko Tamura, Lidia Rozmus,
Austeria, Kraków 2024.2

ポーランド訪問が実現したのは2023年の9月でした。仕事でオーストリアのウィーンに行くことになり、ついでに3日間だけワルシャワにも行けることになりました。しかし、3日間のうち1日をすべて自由に使えるのは2日目だけで、この日は遠出をしてクラクフまで行ってみようということになりました。高速列車に乗って早朝に到着し、午前中は旧市街を散策、午後からアウシュビッツ強制収容所を見学して夕方にワルシャワに戻るプランです。



クラクフでは雨に降られたのですが、それがかえって良かったのだと思います。まず、クラクフ中央駅から中央広場に向かって歩き、ヤギェウォ大学コレギウム・マイウスに到着したとき、ぽつぽつと降り出しました。雨のせいか観光客はほとんどいなくて、回廊には私たち家族だけしかいない時間がありました。そんなとき、息子は嬉しくなって階段を上ったり下ったりを繰り返していたのですが、「パパ、あれ何？」と聞いてきました。彼が指さす方向を見ると、屋根にはブロンズでできた龍の排水溝があって、龍の口から雨水が滴り落ちていました。ラオスでナーガという蛇の排水溝を見かけたことがあったので、それとずいぶん似ているなと思いました。次に、小雨の中ヤギェウォ大学キャンパスに移動して、コペルニクス像の前で3人揃って写真をパチリ。赤煉瓦の校舎は雨の中でも十分に美しかったです。だから、花が満開になる時期はもちろん、雪が降る中で眺めるのもきっと素晴らしいのでしょう。その後はグロツカ通りに進みました。途中でリング状のパンが売っている屋台がとても気になったのですが、いよいよ本格的に降り始めたので、パンを諦めて私たちは急ぎ足でヴァヴェル城に向かいました。到着した途端に大雨。息子を抱っこして、大聖堂の中を歩いて旧王宮跡の中庭まで駆けて行きました。そう

すると、「ザー」とスゴイ音が聞こえてきます。雨音かと思ったら、屋根の角にある龍の排水溝から雨水が噴水のように飛び出していました。このタイミングで雷も鳴り始めます。「おー!!!」雷鳴の中、龍の口から炎ではなく水が飛び出す様子を見て、息子は興奮していました。最初は天気が良くないことを残念に思いましたが、このとき、私は雨の中の観光も楽しいと思いました。そして、ヴァヴェル城を巡った後は時間が押していたので、私たち家族はすぐにアウシュビッツ強制収容所に向かいました。

ポーランド旅行から1年経って、2024年に『クラクフ 書くための本』を読みました。このリング状のパンはオブヴァジャネックという名前であることを知り、しかも、クラクフ市の中心部でしか買えないことも知りました。また、時間がなくて行けなかった『オスカー・シンドラーの博物館』や『クラクフ・ゲッターの薬局』は必見の価値があることも分かりました。この本から大いに刺激を受けました。クラクフでやり残したことがたくさんあるのでまた行きたいと思うようになり、だから、2025年9月にポーランドに行くことを決めました！2回目のクラクフ訪問の際は『クラクフ 書くための本』でしっかりと予習して、この本を持って行って、掲載されている箇所をすべて回りたいと思います。(齊藤賢人、会員)

追悼 佐々木保子さん 小林 暁子

あまりに急なことでした。

40数年前、道立近代美術館でのボランティアに応募して下さったときが保子さんとの初対面でした。その後ポ文協設立の時お誘いしたところ、ポーランドには深い関心があると言って参加して下さったのです。

ご実家が我が家の近くだったこともあり、ことあるごとに親しくお付き合いさせていただきました。ポーランド旅行、池田町への修学旅行、午後のポエジア、その他各種の例会の企画など、運営委員として熱心に活動していただきました。グループ活動では仲間を大切に、なくてはならな



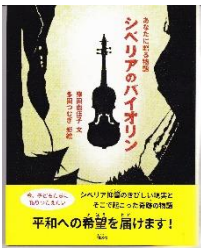
い存在でした。

又、会話の端々にご主人の正さんのお名前が飛び出し、4人のお子さん、お孫さんの話題になると、ほんとにいい子たちに恵まれたと話し、思いやりと愛情にあふれる家族だなとほほえましく思ったものです。

私に電話をくれる時はいつも「あきこさん」と語尾を伸ばして呼び掛けてくれるのですが、先日「もう少し暖かくなったらランチしましょう」と約束していたのです。でも、雪が解けないうちに逝ってしまわれました。

明るく気さくで誰からも好かれていた保子さん。さようなら。また逢う日まで。(こばやし・あきこ、会員)

=写真= 第38回(2024)定例総会 議長を務めた佐々木さん



絵本『シベリアのバイオリン：
あなたに贈る物語』
窪田由佳子(文) 多田つむぎ(影絵)
地湧社 2024.12



とても読みやすい。幼児向きではないが、絵本である。著者の窪田由佳子さんが父親の抑留体験を五年前小説にした『シベリアのバイオリン：コムソモリスク第二収容所の奇跡』（2020）=右書影=を若い世代にも伝えたいと、影絵を高校3年生の多田つむぎさんに協力してもらい出来た本だ。絞りぬいた文章と影絵が素晴らしい。

若い頃『アーロン収容所』会田雄次著を読み、敗戦後、日本人が捕虜となり収容された歴史を知っていたのが、抑留問題に関心を持つきっかけだったのかもしれない。そして三年前、中学生の孫が映画『ラーゲリより愛を込めて』を観て「面白かった」といった言葉が追い打ちをかけた。映画の原作の『収容所から来た遺書』辺見じゅん著を読んでいた頃、旧友がシベリア抑留者の慰霊祭を行う事を知り手伝いをする事となった。



自然、この問題に詳しい方々との交流から様々な知識を得られた。去年は『命の嘆願書』の著者井手裕彦さんとラジオ等で対談することもできた。そして安藤会長からこの本の感想を書く依頼を頂いた。収容所と音楽。興味深く読めた。

あらすじは、音楽好きの少年がバイオリンと出会うところから始まる。戦時中のため日本では自由に練習できないと家族の反対を押し切って十七歳の時に満州へ向かう。やがて召集され戦争末期に侵攻してきたソ連によりシベリアへ抑留される。

抑留のなかでバイオリンを手作り

極寒・飢餓・重労働の過酷な日々、潤いを求め

てバイオリンを手作りする。抑留体験者の手記を読んで感心させられるのはここである。道具など何もない処で工夫をして、例えば鉛筆代わりに消し炭を使ったり、折れたノコギリの刃で木を削ったりする。それと比べると、溢れる物に囲まれている現代人は知恵や工夫が劣るような気がしてしまう。やがて収容所内に楽団ができ、演劇団ができる。小説では収容所生活の厳しさが子細に語られているが、この絵本では少ない。つらい気持ちにならずに読めるのも良かった。

巻末に、「ロシアの人々は暖かくて、いい人達だった」という言葉が出てくるが、今のプーチンのウクライナ侵略を見るとその言葉に違和感を持ってしまう。一般のロシアの人々は、きっとそうなのだろう。悪心を持つ権力者を憎みたい。

戦争は決してしてはならない。しかし俗な言葉だが、仕掛けられて負けると酷い目に合う。極めて寂しいことだが、大国に有徳な指導者が見当たらない今、日本の安全に不安を覚える。頼りなく見える今の政治家達に日本は守れるのかと薄ら寒い気がする。

ポーランドの人達との友好を大切にするわが協会の姿勢を誇りに思う。同時に多くの日本人がわが協会の形を真似て多くの国々の人たちと温かな交流をされることを願いたい。（三田剛己、会員）



李恢成さん追悼 長屋 のり子

あの衝迫は忘れられない。あの喜びは忘れもしない。二〇〇七年(と記して今更のように私は驚く。あれから十八年もの歳月が流れたのだ。光陰が私に過ぎたのだ!)の秋のとある日、まぎれもない李恢成さんがあの端正なお貌で我が家の海に向くお玄関に立っていらした。はっとするほどの長身の偉丈夫、美丈夫でいらした。風除室から更にもうひとつドアを開けて既にまさに降臨! といった風になにこやかに、まるで十年の知己の親しさで其処にいらした。

その頃小樽の丘陵の我が家のもうひとつ上の家にロシア文学の工藤正廣さんが仮住まいをなさっていて、彼との待ち合わせ場所に我が家が指定されたものらしい。二階のリビングに昇る途中の階段脇の本棚に立花隆、村田喜代子、中沢新一のコーナーに並んで十数冊の李恢成コーナーのあるのを目聡(ごとく)見つけられて「おう!」とその遭遇に歓声をあげられた。足をとめてご自分の本を取り出されて「『見果てぬ夢』に此处で会うとは感激以外の何ものでもないなあー」と心底真



底親しい表情でもう一度しげしげと老いた文学少女の顔を、とりわけ眼をまっすぐに凝視(みつ)められた。無垢な喜びようでいらした。あの瞬間、私と李恢成さんとの間にある種の清潔堅固な信頼が芽生えたような気がする。一瀉千里すみやかに私達は打ちとけた。李恢成さんは眼下の日本海に歓声をあげ、広い窓を褒め、飾られた絵を賞め、私達の生活調度の全てを触ったりとりあげたりして感に堪えないという風に全く素直に賞賛して下さった。

やがて工藤正廣さん、新宿書房の村山さんが揃って、私はその日有頂天で、なりきりレヴィ=ストロースで自慢気に野生の思考を語り、“プリコラージュ”を得々と語った。李恢成さんは眉をひそめるでなくおおらかにそれを聞いてくださっただけでなく、その後、斧をかついで大きな長靴で山を降りて来る夫を裏窓からの視界に捉えるや「おっ! プリコルールがやってくるよ、まさに彼は森番メラーズといった風じゃないか!」と快活に仰有った。さすれば私はチャタレー夫人! 悪くない! 家で森番メラーズを加えて二時間ばかり海を愛でたあと、人嫌いの夫を家に置いて私達四人はその頃経営に携わっていた堺町の「多喜二」という寿司屋に繰り出してふんだんに寿司を摘み思う存分に日本酒を空けた。午後八時を過ぎる時間からは、広い大正元年創築の特別室での接待だったので、自由気儘に振舞い、椅子の席を降りて部屋の壁に背を預けて床に足を伸び伸び投げ出して放縦好き放題の話題に興じて深夜まで話し込んだ。

それが李恢成さんとの最初の出逢いで、いきな

り十時間の余に及んだと思う。稀有な忘れられない世にない素晴らしい豊熟の時間だった。今思い出しても恍惚陶然とする。友人の作家(宮内勝典)にその日の様子をそのあと微に入り細に亘り報告すると「分かるよ、寛容の人なんだ。僕なんか新進の時代からどのくらいお世話になったかしれない。今では僕がこうしてまがりなりにも大学の客員教授をやっているが、今でも何処で飲んでも食べても磊落(らいらく)に奢ってくださるし帰りがけには一万円札を渡して下さって、タクシーで帰らなきゃあ駄目だよって労われつづけている。小説は一字一句ノミで彫り込む、刻み込むように大事に書かなきゃ駄目だ、と僕みたいに不器用な寡作の作家を鼓舞擁護しつづけて下さるんだ」と大きく肯いていたことも、余談ながらつけ加えておこう。その優しい人となりに触れ直す意味でも。

我が家の李恢成コーナーに、その先はずっと彼の恵贈本が増えつづけたことは言うまでもない。真に美しい書跡の署名(サイン)が添えられて。

人の死はいつも唐突にやってくる。その李恢成さんがこの一月五日、誤嚥性肺炎で亡くなった。悲しみにくれながら私は書棚の彼のコーナーからまず『砧をうつ女』を取り出して精読を始めている。その初々しい精悍緻密な文章にあらためて打たれつづけている。人は逝くものだと知りつつも、ご逝去の悲痛、悲傷とまらない。

(ながや・のりこ、詩人、会員)



『KA』という体験 渡会 やよひ

昨年 2024 年は私にとって画期的な年でした。ヴェリミール・フレーブニコフの叙事詩『KA』発行に携わることができたからです。フレーブニコフ(1885-1922)はロシア帝国に生まれ、各地を放浪、36歳の若さで客死した詩人ですが、数々の実験詩を発表、ロシア・アヴァンギャルドの領袖とも呼ばれ、伝説と謎に彩られた詩的生涯を送りました。

『KA』を初めて目にしたのは、敬愛する北海道出身の詩人、支倉隆子さんの個人誌『ALL ん私記』77号(2020)でした。最初の出だしは〈私にはkaがいた〉でした。私はこのkaという突然の呼び名に惹きつけられ、〈kaは魂の影であり、分身であり〉(kaには時間の関所がない。kaは眠りから眠りへ歩み、時間をよこぎって青銅時代にたどりつく)と続く、ただならぬ言葉にびっくりしました。その言語の斬新さイメージの美しさ、残酷と奇想に夢中になりました。

『KA』は2023年の94号まで連載されて終わりました。『KA』の日本語訳は支倉さんが初めて試みられたということで、まとめて冊子にして読むと、その言葉に驚愕しながらも、意味を追おうとすると先に

進めない状態に何度もおちいりました。そのとき私は『KA』が名うての難解な詩集といわれることを思い出しました。思えば支倉さんの名訳がまず私を魅了したともいえるでしょう。

それから一年後、支倉さんと親交のある小樽の長屋のり子さんから支倉訳『KA』発行の企画があるとお聞きしました。支倉さんと詩劇などで交友のある東京近郊の詩人たち、佐波ルイ、金井裕美子、木内ゆかさんなどが携わり、なんと私も北海道組として仲間に入れてもらえることになりました。それからの数カ月、熱くて冷たく、麗しくて狂おしい『KA』の原稿が、ゲラが、メールで、郵便で、何度行き来したのでしょうか。私はおもに校正を手伝わせて



いただきましたが、編集の過程で、難解なところ、判別の難しいところは長屋さんが直接、支倉さんご自身に電話で確認することもしばしばでした。そして横長、横書き三十数頁の本文が出来上がり、表紙を決める段階になり、長屋さんが出版社から色見本を取り寄せ、支倉さんご主人で画家の川瀬裕之さんといろいろ案を練ったのもスリリングで興味深いことでした。

こうして、編集・佐波ルイで阿吽塾から12月発行のめどがついたころ、『KA』発行に大きなサプライズがありました。なんと、巻末に名古屋外国語大学学長でロシア文学の泰斗であられる亀山郁夫先生に解説「フレーブニコフ『カー(Ka)』に寄せて」を

書いていただけることが決まったのです。また、北海道大学名誉教授で北海道ポーランド文化協会会長の安藤厚先生には解題「支倉隆子とフレーブニコフ」として、キャンパス時代を含めた詩人支倉隆子像を書いていただけることになりました。人生をロシア文学研究に捧げてこられたお二人の重厚で意義深い文章を拝読して胸がいっぱいになりました。両先生には史実の検証や校正の誤りもご指摘いただき、感謝の念は尽きません。

長年、細々と詩を書いてきた私の『KA』体験は、今まで知ることのなかった新たな詩の世界を体感することでもありました。フレーブニコフの詩はあまたの宝石を隠した漆黒の岩山のようなので、これからその鉱脈をハンマーでコツコツと掘り当てていきたいと思っています。(わたらい・やよひ、詩人)



会員動向 (2025.1~3)

逝去:佐々木保子さん(2025.3.1 没、謹んでご冥福をお祈りします)
 入会:住谷秀保、高松菊乃、退会:吉田邦子 (敬称略)

ご寄付 (2024.12~25.3) 深謝!

(1口千円)(5)関口時政(2)高橋健一郎、石田レイ子
 (1)長田佳宏、野村信史、支倉房子

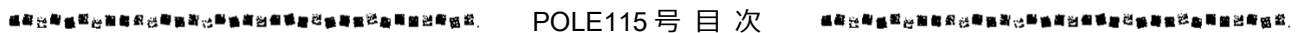
年会費 (2024.9~25.8) 納入のお願い

年会費の納入をよろしくお願ひ申し上げます。

年会費:一般3,000円、学生1,500円 また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります。

※未納の方へのご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

- ◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会
 (他銀行からの送金の場合) 店番(279) 預金種目(当座) 店名(二七九[ニナナキユウ]店) 口座番号(0019735)
 - ◇北洋銀行(本店営業部) 普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドブ
 ンカキョウカイ ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料
- ※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください



POLE115号目次

《第115回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2025-2『水の中のナイフ』5/8(池田光良)..... 1
 《第116回例会》講演&上映会「ポーランドと日本:新渡戸稲造とポーランドの偉人たち」6/10..... 2
 《第114回例会》報告 ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2025『イーダ』(池田光良)..... 4
 〈新会員のひと言〉「ポ文協」に入会して(樋口みな子) さっぽろ雪まつり第49回国際雪像コンクール..... 5
 〈新刊紹介〉『ジェロムスキ短篇集』(前田理絵) 『いまは、ここがぼくたちの家:ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』(先川信一郎、熊谷敬子)..... 6
 ヴィスピャンスキ作、津田晃岐訳『婚礼』に触れながら(田村和子) 展覧会 若きポーランド~色彩と魂の詩 1890-1918..... 8
 〈新刊紹介〉『クラクフ:書くための本』(齊藤賢人) 追悼佐々木保子さん(小林暁子)..... 9
 〈新刊紹介〉絵本『シベリアのバイオリン:あなたに贈る物語』(三田剛己) 李恢成さん追悼(長屋のり子)..... 10
 『KA』という体験(渡会やよひ)..... 11

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方	
	TEL・FAX 011-556-8834, mail: hokkaidopolandca@gmail.com	安藤厚/池田光良
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付		熊谷敬子/越野誠
	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	

POLE no.115 (April 2025)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: Video viewing of Polish masterpiece film "Nóż w wodzie" directed by Roman Polanski, 5/8/2025 (M. Ikeda)	1
Announcement: Lectures: "What Nitobe Inazō said about the Polish heroes and Poland" by Jadwiga Rodowicz-Czechowska & "Polish women in the independence fight at the turn of the 19th - 20th century" by Małgorzata Basaj, and documentary film screening "Piłsudski Bronisław - zesłaniec, etnograf, bohater" directed by Waldemar Czechowski, 6/10/2025	2
Report: Video viewing of Polish masterpiece films 2025 "Ida" directed by Pawel Pawlikowski, 3/19/2025 (M. Ikeda)	4
New member's message (M. Higuchi), Polish team from ASP Wrocław at the 49 th International Snow Sculpture Competition in Sapporo 2/2-7/2025	5
Book Review: "Opowiadania Stefana Żeromskiego" translated by M. Kohara et al. (R. Maeda), "Teraz tu jest nasz dom" by B. Gawryluk translated by K. Tamura (S. Sakikawa and K. Kumagai)	6
Essay on Wyspianski's "Wesele" translated by T. Tsuda	8
Book Review: "Kraków: Książka do pisania, wersja japońska" by E. Tabakowska, K. Tamura and L. Rozmus (M. Saito), In memory of Ms. Yasuko Sasaki (A. Kobayashi)	9
Book Review: Picture book "The Siberian Violin" by Y. Kubota (T. Mita), In memory of Mr. Lee Hui Sung (N. Nagaya)	10
Moved by V. Khlebnikov's prose poem "KA" (Y. Watarai)	11